

白氏文集 三十五 長恨歌 (五)

加藤淳平

これ以下は歴史的事實に非ず。玄宗の楊貴妃を慕ふ餘り、道士をして、仙界に貴妃を訪ねしめたるは白樂天が創作なるらし。樂天は晩年佛教に傾倒すれど、道教は唐の國教なれば、ここに描かれたる道士の活動、仙界の模様、仙女の生活等に、馴染深かりしならむ。

長恨歌 (五)

長恨歌 (五)

悠悠生死別經時 悠悠たる生死 別れて時を經たり
魂魄不曾來入夢 魂魄 曾て來りて夢に入らず
臨邛道士鴻都客 臨邛の道士 鴻都の客
能以精誠致魂魄 能く精誠を以て 魂魄を致す
爲感君王展轉思 君王の展轉の思ひを 感ずるが爲に
遂教方士慇懃覓 遂に方士をして 慇懃に覓めしむ
・・・・・ (四行略)

忽聞海上有仙山 忽ち聞く 海上に仙山有りと
山在虛無縹渺間 山は 虛無縹渺の間に在り
樓閣玲瓏五雲起 樓閣は玲瓏にして 五雲起り
其中綽約多仙子 其中 綽約たり 仙子多し
中有一人字太眞 中に一人有り 字は太眞
雪膚花貌參差是 雪の膚 花の貌 參差として是ならん
金闕西廂叩玉扃 金闕の西廂に 玉扃を叩き
轉教小玉報雙成 轉じて小玉をして 雙成に報ぜしむ
聞道漢家天子使 漢家の天子の使ひと 道ふを聞きて
九華帳裏夢魂驚 九華帳裏 夢魂驚ろく
攬衣推枕起徘徊 衣を攬り 枕を推し 起ちて徘徊す
珠箔銀屏邈迤開 珠箔銀屏 邈迤として開く
雲鬢半垂新睡覺 雲鬢半ば垂れ 新たに睡りより覺め
花冠不整下堂來 花冠整はず 堂を下りて來たる

(大意) 遙かに遠い生と死の世界に別れて、長い年月が経った。貴妃の魂魄が玄宗の夢に入って來ることもない。ある時長安の都に、四川省の臨邛から、誠實を盡して魂を招く道士がやって來て、玄宗が展轉として貴妃を思ふ思ひに同情し、部下の方士たちを仙界に派遣して、慇懃に貴妃を搜索させた。すると海上遠くに仙界の山があると聞く。山のあるのは、縹渺たる虚無の世界であり、そこには玲瓏たる樓閣が建ち、五色の雲が湧き立つ。その清淨精妙な中に多くの仙人が住んでゐるが、そこに一人の仙女が居り、名を太眞(楊貴妃が女道士だった時の名)といふ。雪のやうに白い肌と花のやうに美しい顔貌のその人が、尋ねる仙女に違ひないとのことだった。それを聞いた道士は、仙女の住む宮殿の西の回廊を訪ねて、玉造りの扉を叩き、召使に侍女へ取次がせる。仙女は、漢土の天子の使ひと云ふのを聞いて

驚き、花の模様の帳の中で夢から覚める。衣装を取り、枕を押しつけて起って歩き、珠のすだれと銀の屏風が次から次へと開く。豊かな鬘を半ば垂らせて、睡りから覚めたばかりの仙女が、身に附ける髪飾りもそこそこに、奥から降りて来た。

(平成三十年十月十三日受附)